NEJM Journal Watch general medicine の紹介　No.16

今回の話題はいずれも日常的に診ておられるきわめてコモンな問題に関する論文です。

１）8 月 15 日号（2020）より
担当：小林祥也

題： Metformin use in patients with renal impairment

結論：軽度から中等度の腎機能低下患者であれば、乳酸アシドーシスのリスクは高くない

原題：Chu PY et al. Hospitalization for lactic acidosis among patients with reduced kidney function treated with metformin or sulfonylureas. Diabetes Care 2020 Jul; 43:1462

本文：2016 年、アメリカ FDA は観察研究データの結果から、中等度の腎機能低下患者でのメトホルミン(MET)の使用を認可した。薬剤性乳酸アシドーシスの危険性は高くないことがデータから示された。この研究では退役軍人を対象に、新たに MET または SU が投与され、eGFR<60mL/min/1.73m2 以下または、血清 Cre が男性 1.4mg/dL 以上、女性 1.5mg/dL 以上でも投与が継続された症例をもとに研究が行われた。プロペンシティマッチングした MET 群 25000 人、SU 群 25000 人のうち、腎機能低下が確認された以降の期間における乳酸アシドーシスでの入院率を調査した。乳酸アシドーシスによる入院率は年間 1000 人あたり MET 群では 4.2 人、SU 群では 3.7 人と優位な差は認めなかった。サブグループ解析にて、eGFR<45 の患者群において同様の入院率は MET 群 12.9 人、SU 群 8.6 人と、軽度な差は出るものの統計学的な有意差は認めなかった。
コメント(Allan S. Brett, MD)：本研究結果は改めて軽度から中等度の腎機能低下患者におけるメトホルミンの安全性を示したと言える。しかし、eGFR<30 の患者には言及されておらず、FDA でも eGFR<30 の場合は禁忌となっている。

２）8 月 1 日号（2020）より

担当： 星野潮

題：急性憩室炎が疑われる症例での CT の効用

結論： CT と臨床的評価により 40%の患者で鑑別診断が可能であった

原題：Weinrich JM et al.
MDCT in the setting of suspected colonic diverticulitis: Prevalence and diagnostic yield for diverticulitis and alternative diagnoses.
AJR Am J Roentgenol 2020 Jul; 215: 39

本文：全身 CT は憩室炎の確定のための画像診断として第 1 選択となる。ドイツの一施設における研究で、1069 例（平均年齢 60 才）の患者で CT により第 1 に急性憩室炎が疑われる頻度を調べた。さらに CT と臨床的評価から憩室炎と確定できなかった症例の鑑別診断も行った。最終診断は診断基準に沿って行われた。
　臨床的に憩室炎と最終診断されたのは 561 例（53%）で、CT 診断における偽陰性は 5 例、偽陽性は 1 例に過ぎなかった。40%で他疾患の鑑別診断がなされ、8%は診断がつかなかった。他疾患の鑑別診断がなされたものは、虫垂炎（13%）、感染性大腸炎（11%）、感染性胃腸炎（8%）、尿路結石（6%）腎盂腎炎（5%）であり、虚血性腸炎、便秘、血腫、小腸閉塞、肺炎はそれぞれ 4%であった。

コメント：この報告から、CT による憩室炎疑い患者での診断結果がよくわかる。診断されたのは約半数に過ぎず、沢山の鑑別診断があげられた。また、憩室炎疑いの患者の多くに対し（経験的治療に対抗して）間接的に比較的多くの鑑別診断症例も示している。